

案内書・紀行文からみた明治・大正期の伊香保温泉

関 戸 明 子

Ikaho Onsen described in guidebooks and travel writings between the Meiji era and the Taisho era

Akiko SEKIDO

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第 73 卷 47—64 頁 2024 別刷

案内書・紀行文からみた明治・大正期の伊香保温泉

群馬大学共同教育学部社会科学教育講座

関戸 明子

一 はじめに

他の場所への身体的移動としての旅行は、期待していたモノ・コトとの出会いや偶発的な出来事などによって、旅人にさまざまな経験をもたらす。本稿は、旅人たちが妙義山の岩山に登り、風景を眺めた経験をとり上げた前稿（関戸二〇二三）に続くものであり、伊香保温泉を対象とする。

『国民新聞』に一八九八（明治三一）年一月から半年にわたって連載された徳富蘆花『不如帰』^{ほととぎす}では、主人公の新婚旅行先として伊香保が描かれたことよって、その名を広めることとなった。群馬県立土屋文明記念文学館では、企画展『榛名・伊香保文学紀行―旅人たちのものがたり―』が開催され（群馬県立土屋文明記念文学館二〇〇八a）、紀行文を集めた『青き上に―榛名・伊香保文学紀行―』の編纂もなされている（群馬県立土屋文明記念文学館二〇〇八b）。このように伊香保に関する作品は豊富に残されており、格好の題材を得ることができる。

本稿の目的は、伊香保を訪れた文人・知識人の書き残したテキスト

をもとに旅行先での経験を把握し、明治・大正期の伊香保温泉がどのようなイメージで認識されていたのかを、関連資料から詳らかにすることにある。鉄道普及前後の温泉地への旅行経験を読み解く一例としたい。

以下では、二において伊香保の社会構造、潜在の仕組み、交通手段を概観する。そして三では大槻文彦の「上毛温泉遊記」『伊香保志』「伊香保行」、四では成島柳北の「あたまの洗濯」「四日ノ菖蒲」、五では『伊香保みやげ』掲載の作品を取り上げる。三と四は明治前期、五は大正期をおもに扱うことになる。

本稿では、引用文で用いられている旧字体は原則として新字体に改めた。一部で用字を変更しており、振り仮名や句読点については、筆者の判断により適宜加除を行った。引用文には現在からみれば不適切な表現が使われているが、本稿では歴史的文脈を尊重して原典のままとしている。三から五の節の初出では、著者・刊行年・参照ページを明記したが、それ以下は煩雑さを避けるため、同じ節内では参照ページのみを記した。

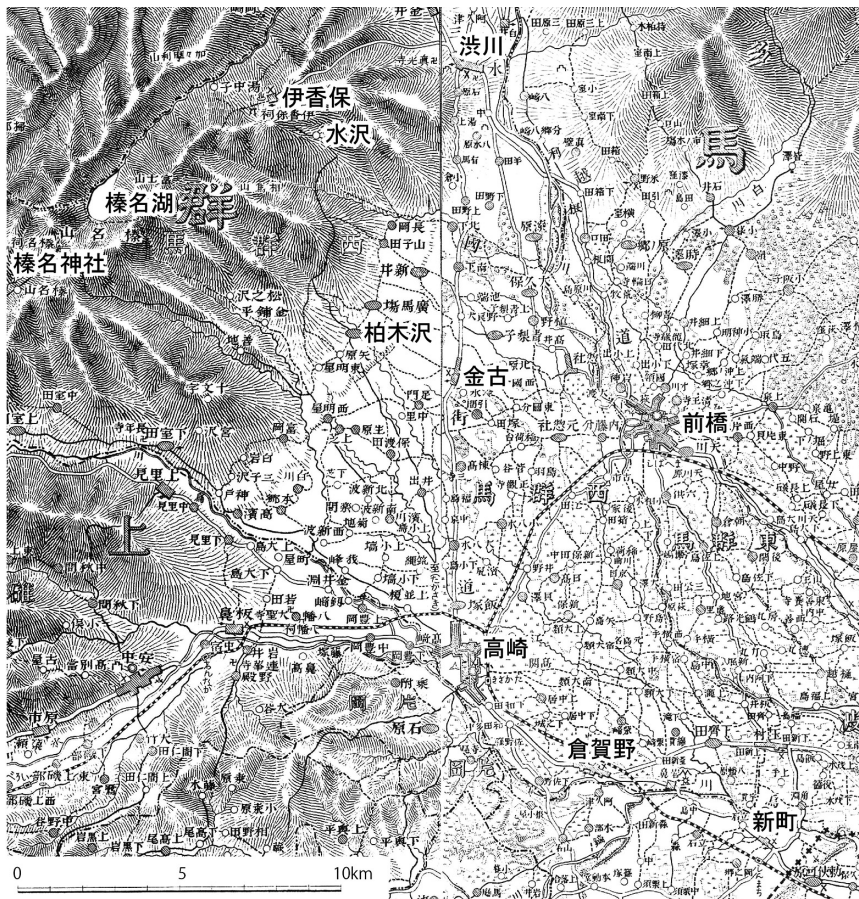


図1 伊香保温泉と周辺地域
基図：20万分の1「宇都宮」「長野」1894年修正

二 伊香保の社会構造と交通手段の変化

1 社会構造と温泉の利用形態

伊香保温泉は、群馬県の中央部、榛名山北東の山腹に位置しており、標高七三〇～八〇〇mの斜面に、温泉地の中核となる石段街が形成されている(図1)。

伊香保の温泉利用は社会構造によって規定されていた(伊香保町教

育委員会一九七〇、一三九～一六八頁、北條一九六三)。伊香保の百姓は、近世を通して中世の土豪を起源とする一四軒の大屋に固定されており、大屋は、屋敷地・耕地・温泉権を世襲して独占し、門屋・店借という従属層を抱えていた。大屋一四軒のうち、一二軒に十二支を、残り二軒に乾・坤を冠して、その干支の年に年番で名主を勤める制度が一八七二(明治四)年まで続いた。山村(一九六九)では、伊香保は地元資本が温泉権・土地所有権を独占し、温泉共同体的・閉鎖

的性格を示し、第二次世界大戦後の新しい観光開発のブレーキとなっている伝統的温泉観光集落と位置づけられている。

温泉は市街地の南にある源泉から大堰を通し、そこから決められた大きさの小間口より湯が分けられて大屋の屋敷地に引き込まれていた。したがって、温泉の流量や寒暖をめぐっては上段のほうが有利であった。図2および表1に大屋の屋敷地の配置を示した。この図では、湯の流れが朱線で、その流出口の湯滝が枳形で描かれており、一四軒の屋敷地に引き込まれているさまが見て取れる。こうした大屋の屋敷地の一部において、門屋・店借は湯宿や商店などを営んでいた。

温泉をめぐる権利関係は、明治中期から大きな変化を生じた。一八七八(明治一)年の大火を機にした経済的危機によって、社会構造が次第に変動し、温泉利用権の小間口が分割されて旧門屋層や外部資本によって買い取られていった(千葉ほか一九六四)。

このような社会変動の実態を一八九二(明治二五)年の鳥瞰図から読み解きたい。伊香保温泉の鳥瞰図は、北から南へと俯瞰する構図を基本とし、伊香保神社を上部に置いて石段街を描いている。図の中には、

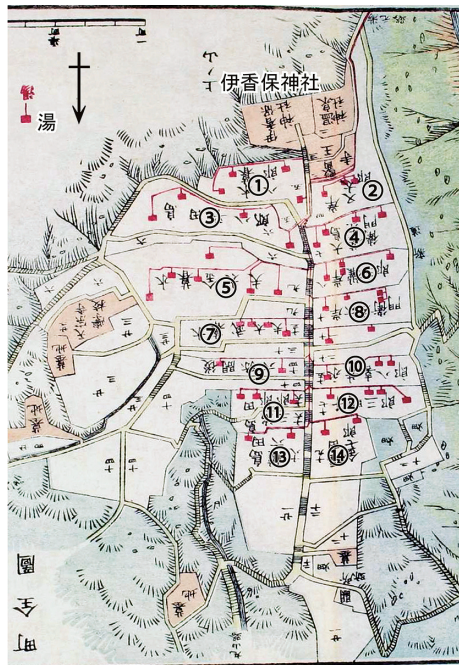


図2 大屋の屋敷地の配置

高い位置が上になるように原図を回転した。
『伊香保志』(1882年)所収「伊香保町全図」
(早稲田大学図書館所蔵)

旧大屋層と旧門屋層にみられる建物の規模の差が写實的に表現されていると考えられる。図3では、石段の中央に湯樋が描かれており、石段に面した通り沿いには小規模旅館と商店が建ち並び、複数の建物を有する規模の大きな旅館は石段から奥に入ったところにみられる。

表2からは、一四軒の旧大屋の半数以上がすでになく、新たな経営者に入れ替わっていることがわかる。このうち、⑬岸権三郎、⑭木暮金太夫、⑮木暮武太夫、⑯千明三郎の四軒が第二次世界大戦後まで継続することになる。宿の経営者が交代しても、石段の奥に大規模旅館が位置するという基本的な構成は、明治期から昭和初期の鳥瞰図を通覧してもほとんど変化していない(関戸二〇〇二)。

図3の左奥には御用邸がみえる。これは一八九〇(明治二三)年に設置された

表1 伊香保温泉の大屋一覧

| | | | | | |
|----|---|-------|----|---|--------|
| 1 | 丑 | 木暮八郎 | 2 | 申 | 岸又太郎 |
| 3 | 卯 | 島田平八郎 | 4 | 未 | 大島甚左衛門 |
| 5 | 寅 | 木暮金太夫 | 6 | 辰 | 岸権三郎 |
| 7 | 子 | 木暮武太夫 | 8 | 巳 | 岸六左衛門 |
| 9 | 戌 | 後閑弥六 | 10 | 午 | 永井喜八郎 |
| 11 | 亥 | 島田千三郎 | 12 | 酉 | 千明三郎 |
| 13 | 坤 | 島田権六 | 14 | 乾 | 福田金七郎 |

大屋の表記は『伊香保志』にしたがった。
数字は図2の丸数字に対応。



図3 明治中期の伊香保における温泉宿の分布

基図：町田太郎／印刷発行「上州伊香保温泉場名所全図」1892年(筆者蔵)

もので、これにより保養地としての伊香保の名声を高めることになった。また右端の向山には岩崎別荘がある。三菱財閥の岩崎弥之助は一八八六(明治一九)年から一八八九年にかけて温泉権を買い受けている(北條一九六三、一二七〜一三三頁)。

表2 1892(明治25)年における温泉宿の一覧

| | | | | | |
|----|-------|-------|----|-------|--------|
| 1 | 岫雲楼 | 島田多朔 | 23 | キムラ屋 | 木村利平 |
| 2 | 福一楼 | 福田輿重 | 24 | 聚遠館 | 木暮武太夫 |
| 3 | 香山楼 | 村松秀茂 | 25 | 原沢屋 | 宮田清六 |
| 4 | 福田屋 | 亘連三 | 26 | 洗心館 | 大島甚左衛門 |
| 5 | 叶屋 | 大塚政五郎 | 27 | 金田屋 | 金田辰造 |
| 6 | 梅屋 | 梅村茂二郎 | 28 | 中沢屋 | 中沢五郎平 |
| 7 | 福田屋 | 福田善十郎 | 29 | 才田屋 | 齋藤長吉 |
| 8 | アブラ屋 | 萩原清四郎 | 30 | 松葉屋 | 萩原重朔 |
| 9 | カシワ屋 | 茂木忠造 | 31 | 後閑楼 | 都丸要吉 |
| 10 | 山城屋 | 真淵熊蔵 | 32 | 森田館 | 森田秋三郎 |
| 11 | 新井屋 | 一倉半平 | 33 | 鋳栄館 | 石坂恵十郎 |
| 12 | 吉田屋 | 金井忠作 | 34 | 仁泉亭 | 千明三郎 |
| 13 | 古久屋 | 森田喜三郎 | 35 | カメ屋 | 金井市太郎 |
| 14 | 香雲館 | 塚越七平 | 36 | マチダ屋 | 町田市太郎 |
| 15 | フヂノ屋 | 齋藤仙助 | 37 | 山一屋 | 宮下守太郎 |
| 16 | タバコ屋 | 横手信太郎 | 38 | 八百屋 | 齋藤卯之助 |
| 17 | 丸本屋 | 萩原亀太郎 | — | 寺島屋 | 寺島金四郎 |
| 18 | 浴蘭楼 | 岸権三郎 | — | 松島屋 | 新里ソメ |
| 19 | キバチ屋 | 宮田ヒロ | — | スミヨシ屋 | 田中伝八郎 |
| 20 | 河内屋 | 羽鳥善吉 | — | 吉野屋 | 半田飯七 |
| 21 | 杷翠楼 | 木暮金太夫 | — | 中澤屋 | 中沢歌吉 |
| 22 | シンブンヤ | 森田昌太郎 | | | |

宿名と経営者の表記は鳥瞰図にしたがった。数字は図3の丸数字に対応。
 ーは図中の記号が判読不能または記載なし。
 町田太郎/印刷発行「上州伊香保温泉場名所全図」1892年より作成。

2 温泉宿での滞在の仕組み

明治前期には、温泉宿での滞在は宿泊と食事が分離しており、湯治客は自炊を基本としていた。商人が宿に出入りし、必要な物を客に売り歩いていった。

一八八〇(明治一三)年の『伊香保温泉独案内』には戸長役場において取り決めた価格が掲載されている。座敷の善し悪しによって幾らかの差はあるとしつつ、部屋代は一週間が基本となっていて、眺めのよい座敷が一円五〇銭、相部屋だと一人四銭五厘、夜具は一日ごとに二銭から一銭二厘と幅がある(表3)。当時は人を雇って炊事を頼むか、自炊するかのいずれかであった。そこで、薪一個は二銭、飯焼き賃は三人までが一週間一二銭五厘といった価格が設定されていた。

食べ物としては次のものを掲げているが、魚・鳥・獣肉は時々欠乏するとある(森本一八八〇、一四頁)。近場から調達される食材がほとんどであったと考えられる。

- 鮎 鱒 鱒 鯉 鮓 やまめ 鶏 家鴨 鶉 雉 鶺鴒 鹿 猿
- 兎 猪 鶏卵 薯蕷 大根 茄子 瓜類 葱 芋 甘藷 栗
- 柿 梨 蕎麦 饅頭 餅 粕漬瓜 下等酒 豆類 干瓢
- 乾海苔缶詰

浴客必携品は次のとおりで、遊歴者以外は持参するのがよいとある(森本一八八〇、一四一五頁)。鯉節や食塩、酒、缶詰の魚肉や果物など食料に関するものが多い。こうした案内書の読者は、近隣の湯治客ではなく、東京方面からの知識人などを想定していたため、品質のよくないものを避ける用意を求めたのであろう。

- 寒暖計 望遠鏡 洋氈 シヤツ 小刀 瓶口抜 量目杯 書籍類
- 長手拭 上等鯉節 上等食塩 上等酒 田麩類 管詰魚獣の肉
- 全果類 湯葉 椎茸 葛粉

一八九七(明治三〇)年の案内書では、以下に要約するような「浴客の心得」となっていた(木暮一八九七、三三三三六頁)。

伊香保温泉には、宿賄 室貸の両方があるが、滞在者のためには自炊のほうが便利である。浴客の立場でいえば、好みの客舎で部屋を見立てて、夜具も相應の物を注文し、飯焚婦も普通飯焚婦、雇切等があり、好みの者を雇い入れて、我が意のままに食べ物を煮焼きさせると、自宅で寝起きするのと同様の感がある。病人にとっては、宿の賄いを待つて適当でない物を忍んで飲食するような憂いがなく、経済的にもいたって簡便である。投宿の際には、第一に室料、夜具損料、下婢の給料等について、一週間どれくらいかを問定める必要がある。その他飲食物の価格は取締所において時々相場を営業者に報告し、一定の相場で客に収める規定である。入浴の回数是一日二、三回が適当で、おおよそ三週間を通例の期限とする。

表3 温泉客舎申し合わせ諸価・賃銭表(1880年)

| | 1週間 円銭厘 | 1日 銭厘 | 1個 銭厘 |
|----------|------------|----------|----------|
| 表座敷八畳一間 | 1.50.0 | | |
| 裏座敷一間 | 1.00.0 | | |
| 入込み一人分席料 | 0.04.5 | | |
| 薪 | | | 2.0 |
| 布巾 | | | 2.0 |
| 湯下駄 | | | 3.0 |
| 付け木 | | | 0.4 |
| 上夜具 | | 2.0 | |
| 中夜具 | | 1.6 | |
| 並夜具 | | 1.2 | |
| 飯焚賃三客まで | 0.12.5 | | |

森本春 (1880) 『伊香保温泉独案内』より作成

表4 座敷料・夜具損料・旅籠料の料金(1897年)

| | 1週間 円銭 | 1日 円銭 |
|---------|-----------|-----------|
| 御座敷料一間 | 0.70~2.50 | |
| 夜具 一夜一組 | | 0.03~0.25 |
| 旅籠料上等 | | 0.70 |
| 旅籠料中等 | | 0.45 |
| 旅籠料並 | | 0.30 |

木暮三郎 (1897) 『伊香保の温泉』より作成

表4に示したように、食事付きの旅籠料(宿賄)の設定もあったが、この時期においても、炊事を人に頼むか、自炊するかを選び、座敷一間を一週間単位で借りるほうが主流であった。

3 伊香保までの交通手段

ここでは東京から伊香保に至る交通手段を概観しておきたい。

鉄道開通以前、東京・高崎間の馬車輸送は、一八八〇年には次のように案内されていた(森本一八八〇、一〇八頁)。東京と高崎・前橋の間には毎日乗合馬車が往復しており、内神田連雀町より出発する。前橋との乗合馬車の里程と賃銭は高崎と同じである。賃銭表は表5のとおりで、一里につき五銭の割合、東京からの距離は二八里(一一〇km)、賃銭は一円四〇銭、毎日午前四時に出発して午後五時過ぎに到着する。

高崎から伊香保までの道路は柏木沢を經由するものが本路となっていたが(図1参照)、一八七九(明治一二)年、英照皇太后による伊香保行啓の折、渋川から上がる道が県道となり、幅二間余に改められ、

表5 東京からの乗合馬車の賃銭表(1880年)

| | 里 | 円銭 |
|----|----|------|
| 板橋 | 2 | 0.10 |
| 浦和 | 6 | 0.30 |
| 上尾 | 10 | 0.50 |
| 鴻巣 | 13 | 0.65 |
| 熊谷 | 17 | 0.85 |
| 新高 | 25 | 1.25 |
| 高崎 | 28 | 1.40 |

森本春 (1880) 『伊香保温泉独案内』より作成

表6 伊香保より諸方への賃銭表(1880年)

| | 駕籠1挺 円銭 | 人力車1挺 円銭 | 軽尻馬1匹 円銭 |
|-----|------------|-------------|-------------|
| 水沢 | 0.35 | 0.25 | 0.20 |
| 洪川 | 0.60 | 0.40 | 0.30 |
| 金古 | 0.90 | — | 0.50 |
| 高崎 | 1.30 | 0.75 | 0.75 |
| 前橋 | 1.30 | 0.70 | 0.75 |
| 中之条 | 1.15 | — | 0.60 |
| 四万 | 2.00 | — | — |
| 草津 | 3.25 | — | — |
| 榛名山 | 0.75 | — | — |
| 同往復 | 1.15 | — | — |

森本春 (1880) 『伊香保温泉独案内』より作成

馬車・人力車が往復できるようになった(岸一八八四、一四丁表)。伊香保より諸方への駕籠、人力車、軽尻馬の賃銭表の案内によれば(表6)、高崎・前橋から伊香保までは、駕籠一円三〇銭、人力車七五銭/七〇銭、軽尻馬七五銭となっている。駕籠については榛名山往復一円一五銭、四万温泉二円、草津温泉三円二五銭などがあるが、人力車は道路事情もあつてか山間部に向かう設定はない。いずれも午前一時を過ぎて雇うときには割り増し料金と記されている。

上野と高崎を結ぶ日本鉄道は一八八四(明治一七)年五月に全線開通し、同年八月に利根川西岸の前橋駅まで延伸された。利根川に橋梁をかけ東岸に前橋駅が置かれて両毛鉄道と接続したのは、一八八九(明治二二)年一二月のことであった(関戸二〇二〇)。いずれの路線も一九〇六(明治三九)年に国有化された。さらに上越南線(後の上越線)新前橋・渋川間が開業するのは一九二一(大正一〇)年である。

一八八五(明治一八)年の松永武英『鉄道汽車便覧』によれば、上野・高崎間は一日四往復で、上野五時二五分発・高崎九時二四分着、高崎九時三〇分発・上野一三時二七分着といった時刻が示されて

表7 高崎・前橋から渋川までの馬車鉄道の賃銭表(1897年)

| | 1人 円銭 | 並貸切 円銭 | 上貸切 円銭 |
|-------|----------|-----------|-----------|
| 高崎・渋川 | 0.24 | 2.88 | 3.50 |
| 前橋・渋川 | 0.21 | 2.50 | 3.50 |

木暮三郎 (1897) 『伊香保の温泉』より作成

表8 明治前期における伊香保温泉の入浴客数

| 年別 | 人 | 月別 | 人 |
|-------|--------|---------|-------|
| 1874年 | 14,726 | 1881年1月 | 0 |
| 1875年 | 16,081 | 2月 | 111 |
| 1876年 | 17,519 | 3月 | 2,506 |
| 1877年 | 17,978 | 4月 | 4,055 |
| 1878年 | 8,981 | 5月 | 3,445 |
| 1879年 | 19,077 | 6月 | 2,708 |
| 1880年 | 20,538 | 7月 | 5,329 |
| 1881年 | 30,483 | 8月 | 5,570 |
| | | 9月 | 6,093 |
| 1880- | | 10月 | 2,819 |
| 82年 | 24,883 | 11月 | 417 |
| | | 12月 | 0 |

月別計と総計は一致しないが原典のまま記載した。吾妻健三郎 (1885) 『伊香保温泉略説』より作成。1880-82年の数値は『日本鉱泉誌』による。

いる。一八九四(明治二七)年の風月庄左衛門『汽車時間賃金表』では、上野・高崎間は一日六往復に増えている。時刻は、上野六時発・高崎九時一五分着、高崎九時二分発・上野一二時三〇分着などとなっている。三時間余りと所要時間が短縮されている。

さらに高崎駅前と渋川、前橋駅前と渋川を結ぶ馬車鉄道が、それぞれ一八九三(明治二六)年と翌年に開業した。馬車鉄道は道路に敷設した軌道の上を馬車が走るもので、一日一二往復、一人二四銭/二一銭となっていて、二人乗り一車を貸し切ることでも可能であった(表7)。さらに二つの路線は前橋市で一府一四県連合共進会の開催された一九一〇(明治四三)年に電化され、同年に渋川から伊香保温泉をつなぐ伊香保電気軌道も開業した。こうした鉄道の開業によって、東京からのアクセスが改善された。

表8には明治前期の入浴客総数を示した。一八七八(明治一一)年に落ち込んでいたのは、この年三月に一〇〇軒余が焼失した大火があったためである。『日本鉱泉誌』による二万四八八三人という入浴客数は、日本全体でみて二三位という高い順位にあった(関戸二〇

〇七、四六頁)。とはいえ、一八八一(明治一四)年の月別の数値をみると、一月下旬から二月中旬まで入浴客はなく、春から秋までの季節的営業であったことがわかる。ちなみに鉄道接続後の大正期になると、伊香保は二・七万人の入浴客を迎えており、全国入浴客ランキングでも一〇位に上昇している(関戸二〇〇七、八五頁)。

三 大槻文彦の作品

大槻文彦(一八四七〜一九二八)は日本で最初の近代的国語辞典『言海』(一八八九〜九一年)を編纂した国語学者で、一八七九(明治一二)年に群馬の温泉地を遊覧している。この当時は文部省に勤務しており、休暇三〇日をもらい、三〜四年来、どこへも旅遊していないので伊香保で湯治しようと思いついたとある。紀行文「上毛温泉遊記」は『復軒旅日記』(一九三八年)に収められている。

1 「上毛温泉遊記」

大槻文彦は、八月七日夕方に浅草北富坂町の自宅を出て、万世橋にある開盛社という馬車業者の宿に泊まり、八日午前二時に出発。中山道を行き鴻巣で朝食をとり、午後三時過ぎに高崎に到着し、そこで宿泊した。九日五時、馬にて出立し、三国街道から柏木沢、水沢を経て、午前一時半に伊香保の木暮八郎の宿(図2①)に到着した。一か月ほどの滞在中、船尾滝、二ツ岳の蒸し湯、榛名山などの名勝めぐり、多くの知人と交遊を深めており、「遊浴中の興もいと多し」とある(大槻一九三八、一〜二頁)。九月六日から一〇日にかけては、博物学者・田中芳雄とともに、四万や草津などを周遊した。伊香保滞在中に交遊した一人に岸田吟香がおり、彼の手を経て、紀行文の抄録が同年九月二二日から二九日に『東京日日新聞』に掲載されている。帰路は九月一四日に伊香保を人力車にて出立。渋川に出て堀口藍園

を訪ね、午後二時に高崎に到着。連日の雨で烏川と神流川が増水したため昨日より川留めとなっていたが、今夕に立つ広運舎の夜馬車があると聞き、旅店で休憩、夕食をとって午後七時に出発。船で二つの川を渡り、夜半に熊谷を過ぎ、一五日午前九時に内神田淡路町の広運舎に到着し、一〇時半に帰宅した(三二一〜三二二頁)。往路復路とも二日ほどを要している。

2 『伊香保志』

『伊香保志』は、滞在中に宿の主人・木暮八郎に請われて大槻文彦が執筆したものである。これは一八八二(明治一五)年に三巻の木版和装本として刊行された。巻一には東京から伊香保まで道中記と村の地理や湯治の心得など、巻二には一帯の名跡・名勝、巻三には伊香保の歴史や古今の詩歌・紀行文が収められている。紀行文「上毛温泉遊記」には伊香保のことは詳しくなく、『伊香保志』にて知るべしとある。本書は貴重な地誌的情報を記したものであり、以下には、巻一の「伊香保村」(大槻一八八二、二丁表〜七丁裏)、「温泉」(七丁裏〜一〇表)の二つの節の翻刻を掲載する。本書には独特の振り仮名が付されているので省略せずに、すべて原文のままとしている。割註の部分は、(〜)に入れて一行に表記した。またアルファベットは注釈のために加えた。

「伊香保村」では、Aに村の地勢と家々が段ごとに高くなっているさま、Bに市街の緯度経度や大火があったこと、Cに石段街の概況が記されている。Dにはこの地の標高七九〇mほどで、夏は空気清涼で入浴客が非常に多く、温泉宿は三階四階の大きな建物で、一年に三〜四万人に及ぶとある。表8と比べると、客数はやや多くなっている。Eにはさまざまな商店や遊興施設が記されているが、妓楼については一八八三年に廃止された。Fには諸方への道程と郵便事情、Gには村の土地・戸数・人口など、Hには経済状況と行政事務に関する説明が

ある。当地の繁盛が続く地価が高くなっていること、売上げが大きい温泉宿は一等県税となっていることなど、興味深い記述がある。

伊香保村

A 当村は上野の国群馬郡の西北なる連山の東北の麓にあり。市街ある地は上山といへる嶮しき山の中腹の側崖にあり、南に山を負ひ、西は谷に臨み、前は正北より稍東に向ひて下り、人家は崖をけづり、石垣を畳みて宅地とす。故に家々の屋の棟は一層は一層より高く、其状階梯の如し。

B 此人家の簇れる地の字を香湯と云ひ、北緯三十六度三十一分、東京、西経零度四十九分(録威東経百三十八度五十七分三十抄)にあり、市街東西三町、南北四町、棟数凡四五百(皆明治十一年春、市中悉く焼失して後の新築なり)あり。

C 中央に一条の坂路を開き、石段にて畳みあげ、人家左右に建ち並び、其外裏町もありてすべて上町下町の称あり(町の最上と最下とにて二百尺のたがひなり)。温泉は町より八町ほど山の背にあり。筑にて導き来りて、家々へ引きて内湯とす(湯樋の事は詳に次の温泉の部に説く)。

D 此処の地勢、海面より高きこと凡二千六百尺(日光より高き五百尺、草津より低き二千尺)、山間雲風の中にありて常に風多く、且冬は寒気甚しけれバ、家居は牆壁屋背皆板を用ゐる。然れども夏は空気甚清涼にして、極暑なるも尚華氏の寒暖計(この事、次の温泉の部に説けり)八十度に昇ること少く(朝夕八凡七十度位)、浴治、最効能あるのみならず、清鮮の空気人体に適ひ、且暑を避くるに宜しく、又東京とも程遠からざれば、夏は都鄙の貴賤外国人の人も浴するもの甚多く、その盛なるときは一時に凡四、五千人の客此に輻輳して、浴館各三層四層の巨楼を作り、皆数十の客室(これを壺といへり)を設けあるも家々に殆空室なきに至り、

一年の浴客を算ふれば、大凡三四万人（三四年來の計算）の夥しきに及ぶといふ（客の来ること四月に始まり、十月に終る）。

E その外に酒肆、妓楼、雜商舖、演劇、落咄等の場、俱に簇りて崖に抛り、笑語弦歌は閑泉幽禽の声と相和して日夜に絶えず。実に山谷間なる壺天の一熱境なり。

F 当地より諸方への里程は左の如し。郵便局ありて四月より九月までは日々音信を諸方へ出せり（十月より三月迄八隔日に出す）。

水沢村（東南一里十町） 渋川駅（東二里七町） 榛名山（西南

二里半） 前橋（東南六里） 高崎（東南六里） 東京（東南三

十四里） 四万温泉（西南九里） 草津温泉（西南十三里）

G 当村の幅員は東西二十町余、南北四十町余。東は当村と他の六箇村との入会秣場に堺し、南も十八箇村との入会秣場なる上平、二ツ

岳に境し、西は春名村に、北は湯中子村、祖母島村に隣る。一村の地大抵山腹の窪谷にして平地少く、地質黒くして砂土浮石と雜り、礪確にして水利なく、村民は香湯の一处に集り、往古は皆農なりしに今は大抵浴館を業とし、又は雜種の商となる。

今一村の畠地四五十町歩（内宅地三町六段）、山林二百五十町歩、家数百六十六軒、人別六百五十九人あり（明治十二年夏の調なり。戸数には社寺役場を合せ、人口に八内に寄留百一人あり）。

H 近年、当地の繁昌年に加はり、宅地の地価一等なるは一段三百坪にして五百廿五円の貴きに至り（当県下にて地価の貴きは、高崎、前橋、伊香保と次第すと云、又浴店の商ふ高一年二千五百円以上なるは一

「温泉」では、まず伊香保の源泉の位置景況がIで述べられ、Jでは石段に設けられた湯樋から枝樋へと引湯されて内湯となり、廃湯も集められて脱穀用水車や田畑用に利用されているとある。小間口や風呂場に落ちる湯滝は本書の挿絵にも描かれている（図4）。Kには温泉の温度（摂氏四八・九度）や蒸湯のこと、Lには温泉の特色、Mには源泉敷地の地価について説明されている。関東のなかでは、熱海、伊香保、箱根の順とあり、伊香保の繁昌ぶりをうかがうことができる。

「温泉」では、まず伊香保の源泉の位置景況がIで述べられ、Jでは石段に設けられた湯樋から枝樋へと引湯されて内湯となり、廃湯も集められて脱穀用水車や田畑用に利用されているとある。小間口や風呂場に落ちる湯滝は本書の挿絵にも描かれている（図4）。Kには温泉の温度（摂氏四八・九度）や蒸湯のこと、Lには温泉の特色、Mには源泉敷地の地価について説明されている。関東のなかでは、熱海、伊香保、箱根の順とあり、伊香保の繁昌ぶりをうかがうことができる。

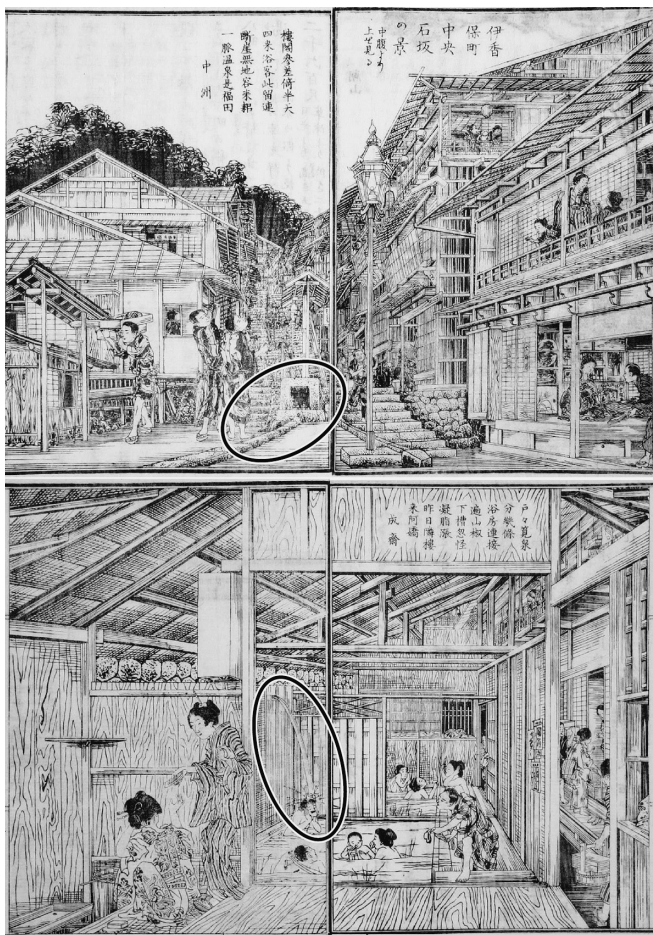


図4 『伊香保志』(1882年)の挿絵

上の石段街の図には温泉を分ける小間口と湯樋、下の浴室の図には湯滝から浴槽に湯が注いでいる様子が描かれている。当該箇所には楕円を付した。（早稲田大学図書館所蔵）

温泉

I 伊香保の温泉の源は、市街の南の方、湯沢の崖に沿ひて八町程山に入り、湯元といへる溪間にあり。この溪の奥なる崖のかなたこなたより流れ出づ、湧きいづる処、凡八箇所あり。土人はその湧口を釜と呼びて、西入、鳥の地獄、吹き出し、竹筒、おはぐる等種々の名あり。その中に熱きもあり、ぬるきもあり、潺々滴々として湧きいで漸に集り、やうく溜りに溜り、樋に引き、堰に湛へ、又筧に導くこと八町にして市街の頭に來り。

J 石坂路の中央に上より下へ湯樋を伏せ、処々に堰を作り、左右へ枝樋を分ちて家々へ引き内湯とす。固より高きより低きへ湯を遣りかけたれば、皆湯滝となりて風呂場へ落つ。家々に設けたる風呂場の数は凡五十五箇所にて、下流は又集り下りて市街の下にて水車にかゝることすべて六箇所なり。皆米を精ぐ。その末流は更に山下の遠近の田畑の用水となる。

K 温泉の熱度は四時朝夕にしたがひてその差ありといへども、夏の午時は大抵源にして華氏の百二十度（この度の事、後に委し）、風呂場にて百十度乃至百十五度なり（冬八大に熱を減ず）。湯元の溪間に五七年前、二ツ岳の蒸湯の廃せる頃に造りし蒸湯の窟の跡あり。熱度の十分ならぬにや、程なく用ゐぬことになりぬ。

L この温泉の殊に奇なりとすべきは、折れる草木の枝の萎れたるをも湯に浸す時はたちまちに蘇生し、或は鯉金魚の類を湯の中に畜ふに、活潑と泳ぎて体肥え、脂づくこと常の水に勝り、又余れる水を田圃に灌ぎて培養の功あるなどなり。これ大に他の温泉に異なる所なり。泉の色は源ハ透明れども、浴場に入れバ少し白く濁る。樋の中の埴土のまざるなるべし。善く味ふれば、わづかに鹹気あり。香臭はなし（源の湧口のおはぐるといふもの、すこし鉄気あり、風呂場にいたれば失す）。

M 凡温泉の源泉敷地（温泉涌く処の地面の称なり）の地価は、各県と

もに皆その県内の諸温泉の位格を比較平均して定めらるといふ。然るに関東にて伊香保、熱海、箱根は繁昌格別なりとて、この三処を比べて定めらる。第一熱海、第二伊香保、第三箱根とすと云。当地の源泉敷地は、一段三百坪に付き地価二万九千円の格位なりといへり（但し、当地の源泉敷地は凡十五坪なりと云。その貴きこと驚くべく、その繁昌をも想ひ遣るべし）。

3 「伊香保行」

大槻文彦「復軒旅日記」には一九〇七（明治四〇）年の「伊香保行」も収められている（大槻一九三八、八九〇九一頁）。短い記録であるが、道程が詳しく記載されているので、取り上げておきたい。

八月下旬、伊香保に入浴しようと思ひ、村松秀茂方に空室があるかと問ひ合わせたところ、満室で空きが出たら電報をするとの返書があつた。その後、通信を受けて九月三日に出発。根岸の自宅から人力車で上野駅に行き、九時四〇分の汽車に乗り、午後一時五分に前橋着。そこから馬車鉄道を使い二時一〇分に渋川着。二〇分後に二人引きの人力車に乗り、五時前に村松方（図3③）に着いた。汽車・馬車・人力車通し往復割引切符二等で四円二二銭、人力車一人増、小雨にて増賃ありと交通費を明記しており、連絡切符を利用している。

帰路についたのは七日で、八時に人力車で伊香保を出て五〇分で渋川に到着。九時一〇分発の馬車鉄道に乗って一〇時四〇分に前橋に着いている。一一時三〇分発（二五分遅れ）の汽車に乗り、午後三時過ぎに上野に到着して人力車にて帰宅した。

宿の主人・村松秀茂（一八四三〜一九二三）は、伊香保町の町長（一八九五〜一八九八年在任）を務め、狂歌師としても活躍した人物で（伊香保町教育委員会編一九七〇、八一〇〜八一六頁）、四泊五日の滞在中、大槻と交遊している。

今回の旅の目的は、榛名湖から流れ出る沼尻川にかかる弁天の滝の

碑を見に行くことにあった。五日、村松とその息子操と三人で、伊香保から約三キロ離れた大滝（珠簾の滝）をみたあと、二キロほど上流の弁天滝に至り、七重の滝を經由して宿に戻っている。大滝、弁天の滝、七重の滝は伊香保周辺の名勝として知られ、鳥瞰図にも描かれている。写実的に描写されている図では、滝の前に置かれた石碑も見出せる（図5）。また、この頃には「海魚」も届いていたことがわかる。



図5 弁天の滝
「上州伊香保温泉場全景」
1911年（筆者蔵）
印刷発行／山内只七
製版／群山堂写真製版部

「弁天滝は…引用者注」断崖にかかりて偉観なり。殊に水多し、高さ四丈許、幅三丈許……。此に茶屋あれど人なかりき。

瀑前の坡上に碑あり。余が此瀑を発見したる自撰の文を余が明治三十二年に建てたるを（木暮八郎担任せり）九年目にて今年始めて来り見たり。今回の伊香保行も実は之が為めなり。帰路二十五町許、七重の滝に至る。茶屋あり息ふ。……茶店にて雑煮汁粉などを売る。十町許にて寓に帰る。午後一時頃なりき。浴す。六時より雨。此の頃、海魚何にても此地に来る（九〇〜九一頁）。

四 成島柳北の作品

成島柳北（一八三七〜一八八四）は幕臣として外国奉行などを歴任し、維新後には欧米を外遊、一八七四（明治七）年に『朝野新聞』の

局長に就任して文人・ジャーナリストとして活躍した（前田一九七六）。以下に用いるのは『朝野新聞』に掲載された記事で、『柳北遺稿上巻』（二八九二年）に収録されている。「あたまの洗濯」は一八八一（明治一四）年九月一日〜二四日、「四日ノ菖蒲」は一八八四（明治一七）年六月二五日〜七月一日に掲載されたものである³。いずれもまだ旅先にいる間に連載が始まっている。

1 「あたまの洗濯」

一八八一年における伊香保への往路は次のとおりであった。九月五日、広運舎の馬車で午後六時に出発。熊谷を過ぎたところで、別の馬車が渠に横転しているのを救うために一時間留まった。六日黎明に籠原で休憩、一〇時に高崎に着いて食事をとった。ここから人力車を雇い、柏木沢から登って水沢観音に立ち寄り、午後五時に木暮武太夫の宿（図2⑦）に到着した（成島一八九二、一七三〜一七五頁）。

帰路については九月一七日、伊香保から渋川に下り金古を経て高崎に達し、そこで昼食をとって午後一時に人力車で出発した。烏川では船が一時間待ち、さらに神流川も船で渡り、夜に熊谷に着いて宿泊。一八日黎明に出立、上尾の先で昼食をとって向島須崎の自宅に帰った。強い南風で砂塵を被り大いに辟易したとある。

帰路に馬車を避け人力車を用いた理由となった往路での出来事は詳細に記されている。五日の夜半、鴻巣に至ろうとする途中、高崎から来た馬車の御者代理の馬丁が強引に交渉してきて、柳北の乗車した馬車の御者と乗り替わった。その馬丁が乱暴な運転で馬車がしばしば横転しそうになったり、客の老婆が転落したりしつつ、熊谷に着いた。そこで正規の御者を得てようやく安心し、急ぐのでなければこうした危険な馬車に乗って夜行することはしないと心に決めたという（一八六〜一八九頁）。

柳北は宿に到着後、知人から一部屋を分けてもらい、一浴一飲した

ところ、気分がよくなり平常のようになったので、効能は「匪夷所思」（「一般人の考えるところではない、常軌を逸している」と記す。「あたまの洗濯」とは、途上で頭痛や眩暈に悩まされたが、来浴後に気分がよくなって回復したことを意味する。以下、伊香保のことを「香山」、自身のことを「漁史」と表記している。

六日……香山ノ浴樓木暮武太夫氏二達ス。遊客充填シ一房ノ佳ナル者ヲ得難シ。幸ニ東山巖君ノ数房ヲ占有スルヲ以テ漁史請フテ其一房ヲ頒チ得タリ。直ニ浴シ直ニ飲ム。四顧スレバ山色雲影ノ奇幻、人ヲシテ快ト呼ハシム。黄昏前、山雲ヲ吐キ雷鳴殷々風雨驟力ニ至ル。爽涼驚ク可シ。……

一浴一飲ノ後、精神快然トシテ平常ノ如クナラントハ嗚呼靈泉ヲ以テあたまの洗濯ヲ為ス。其ノ効能寔ニ匪夷所思ナリ（二七五頁）。

七日は、同道した三遊亭圓生（五代目）が急に東京に戻ることにになり、向山の料亭で歌妓を招いて宴会をした。八日は読書・囲碁で過ごし、宿の主人・木暮武太夫から聞いた伊香保の歴史を書き付けている。地券交付時の土地所有は大屋によって占められ、客の居場所も大屋の名前と部屋番号で呼ばれていたことがわかる。

八日……斯カル風土ナレバ此ノ山中ノ事ハ大小ト無ク大家十二戸ノ管轄スル所ニテ、地券モ皆其ノ所有ナラザル無ク、他ハ尽ク借地人ナリ。故ニ小民ハ大家ヲ称シテ金太夫様、八郎様ト云ヒ、東京ノ誰様ハ平八郎様ノ何番ノ坪ニ在ラツシヤルト称ス。坪トハ座舖ノ事ニテ、漁史ハ即チ武太夫様ノ二十三番ノ坪ニ寓居致スナリ（一七九頁）。

九日は雨の中、榛名湖から榛名神社を周遊した。滞在中、雨が続き

ため一〇日からは来客を迎えて宿で過ごした日が多い。そうしたなか一日は石段街最高所にある酔月楼、一六日は関屋にある酒楼で宴席を設けている。柳北は「もともと宴会と人集めが好きだった」（前田一九七六、二五六頁）という。そして周りの遊客が帰って行くのを見て自身も帰宅を決めた。

一七日と一八日の帰路の顛末を記した後、連載の最後に私評を付している。伊香保では湯桶の修繕があるのが好ましく、高崎までの鉄路が成功すれば改善されるだろうが、食べ物や日用品はよくないので、これらを携行すべきと説いている。

附 香山私評

香山ノ温泉八世人ノ評スル如ク、熱海、函嶺^③ニ比スレバ其ノ功效幾分力多カル可シ。唯夕連日雨降レバ雨水ノ泉道ニ注スルヨリ暖度ヲ減ズル事甚ダシク、鉱氣モ從テ稀薄ニナレバ時々泉道ノ修膳^④ハ有ラマホシク思フナリ。
魚菜ノ乏クシテ価ノ貴キハ勢ヒ已ムヲ得ズ。且ツ価ヲ問ハザルモ亦得可カラザルモノ多シ。蓋シ高崎ノ鐵路成功セバ此憾無キニ至ラン。其レ迄ハ此ニ遊ブ者、宜ク乾物、漬物等ヲ携ヘ往クヲ可トス。其他日用品物、皆極メテ悪クテ貴シ。成ル可クハ行李ニ貯ヘテ往ク可シ（一八九〜一九〇頁）。

さらに文末では、伊香保に浴する者は必ず榛名に遊ぶべしと述べた上で、榛名神社では生計に困って巨杉や老檜を伐って売却していることを惜しみ、一方で榛名湖では古来神があるとして釣漁する者がないので、県の役人が老樹の伐採を止め、漁業を許可すれば、宿に売って利を得られるし、遊客も鮮魚を食べられるので一挙兩便と提言している（一九〇〜一九一頁）。柳北は、新聞掲載の紀行文に社会へ働きかける機能を導入させたと指摘されているが（Frleigh 二〇〇八）、こ

こでも同様の意図が見て取れる。

2 「四日ノ菖蒲」

一八八四年の往路は次のようであった。六月二日、六時二〇分の上野発の汽車に乗り、高崎到着後に食事をとって一時に人力車で発った。車丁は柏木沢の道をとろうとしたが、平坦な渋川を行かせている。柳北は車を下りて歩く処がある柏木沢を経由して客を欺こうとしたと憤っており、伊香保への坂では、暑さで車丁が疲労で遅くなり、自身も暑気に困って休憩したため、午後五時五〇分ぐらいに木暮武太夫の宿に到着した。以前ならば三日ほど要したのに、即日達することのできる「汽車ノ効用」は大きいと述べている（成島一八九二、一九二〜一九三頁）。ちなみに明治天皇が上野・高崎間を往復乗車し開通式典が行われたのは同年六月二五日であり、柳北はその前に乗車していることになるが、文中にとくに言及はない。

帰路は七月七日、朝五時に伊香保を人力車で出発。高崎着は九時で早めの昼食をとり、一時一五分の汽車に乗って、向島の自宅に帰ったのは午後四時一〇分前であった（二〇七〜二〇八頁）。

成島柳北はこの年の一月末に病没することになるが、この滞在中も山道を昇降するのは苦しいとして、邸内と平坦な所以外はあまり出歩いておらず、知人と囲碁などをして宿で過ごした日が多い。この時は閑屋に設けられた紅葉館支館の開業式に臨席するため、医師にも相談して伊香保滞在を決めて旅立った。「四日ノ菖蒲」とは、伊香保は盛夏に遊ぶのに適しているが、それよりも早く出向いたことと、五月五日の節句より先走って菖蒲を用意することを関連付けた表題となっている。

到着した二二日には、鉄道開通で面目一変する勢い、娼楼がなくなり清潔になったと述べつつも、海の魚をはじめ食材の乏しいことを嘆いている。

二四日では、四年前と比べて商店が盛んになったこと、名勝散策のため新道が開かれたことにふれつつ、野鄙な風俗を除去し建築や割烹が改良されれば熱海と対峙するところになると述べている。ちなみに、柳北は熱海温泉をとくに好み、六本の紀行文をまとめた『柳北仙史 熱海文藝』が出版されている（武内一八八四）。

二十二日……漁史ノ寓楼ハ各房皆客有リ其繁盛驚ク可シ。其人種ハ如何ナル者カト窺フニ、半ハ前橋高崎辺ノ客、半ハ東京人ナリ。其中ニ官員ト覚シキ者ハ無シ、華族モ更ニ見当ラス、皆我党ノ人ノミ。……

名山モ近来年ヲ逐テ開ケ、殊ニ汽車ノ便ナルヨリ山中ハ面目ヲ一変セントスル勢ヒアリ。且ツ醜陋ナル娼楼ノ尽ク放逐セラレシカハ山中大ニ清潔トナリシハ喜フ可シ。海魚ハ汽車ノ便有レト思ヒシヨリ乏シク……香魚モ時節猶早ク膳ニ上ホル末タ多カラス。牛、鶏、鶏卵、鱒魚、鱒鱺、泥鰌ノ外ハ食フ可キモノ無シ（一九三〜一九四頁）。

二十四日……街上海店ノ景況モ四年前ト比スレハ非常ニ盛開ヲ加ヘタル如シ。且ツ処々ニ新道ヲ開キ名区ニ遊フ人ノ為メニ便ヲ諮ルモノ亦鮮ナカラスト云フ。……東京ヨリ来ル賓客能ク土人ヲ誘導シテ、漸々ニ野鄙ノ風俗ヲ洗除シ去ラハ、必ス快樂ノ今日ニ過クル万々ナルモノアラン。若シ楼榭ノ建築、魚蔬ノ割烹併テ日新ノ期ニ至ラハ、此地ヲ評シテ熱海ト対峙スル処ト云フモ亦不可ナル無シ（一九五〜一九六頁）。

二六日は、東京・伊香保間の郵便に三日かかることに疑問を呈している。郵便配達制度に敏感なのは、原稿を新聞社へ郵送することが必要であったためであろう。

二八日には、室内にすることが多く複数の部屋を掛け持ちする下女

では不便であったので、専属の下女を雇った。しかし、料理の巧みな熱海と比べると安くはないし、料理も自宅の下女と差がないとして、都会人の指導で高い評価が得られるよう変わることを期待している。

さらに伊香保の景況をみて、この山は遠くなく「大革命ノ期」に及ぶという。そこでは伊香保に東京から来客があるのは盛夏のみなので、旧風を保っているが、汽車の開通によって東京の有力者が進出すれば、大屋の門標も他人の姓名に書き改められるかもしれないと述べている。図3・表2でみたように、この後、大屋の宿の経営者は交替していくことになる。

また割烹料理店についても、横浜・千歳楼や紅葉館の進出によって大きく変わるだろうという。紅葉館とは一八八一（明治一四）年に芝公園紅葉山で開業した高級会員制料亭で、維新の元勳を始めとして、法律・政治・外交・実業・軍事・学校・出版・文芸などの諸領域で日本近代史を推進していった顔ぶれが集った場所であった（岡崎二〇一九）。伊香保の紅葉館は、関所跡に設けられた関泉亭が改められたもので（岸一八八四、一五丁表）、鳥瞰図にも描かれており、図3左下に施設の図像を確認できる。

二十六日……本日正午、郷信及ヒ新聞紙来ル（二十四日発）。香山二在テ最モ不便ト為ス者ハ郵便ノ一事ナリ。東京ヨリ来ルモ香山ヨリ発スルモ共二三日目ナラデハ達セズ。……浴客ノ往クモ帰ルモ、朝夕二発シテ夕ヘ二達スル処ニシテ、郵便ハ三日ナラデハ達セヌト云フ、遅緩モ亦甚ダシカラズヤ。熱海東京間ノ郵便ノ両日ニシテ達スルスラ漁史ハ之ヲ遅シト思ヘリ（一九六〇一九七頁）。

二十八日……本日二錢婢ノ傭ヲ解キテ十錢婢ヲ傭フ。此地ハ一婢ニシテ数房ノ事ヲ受持ツ者有リ。其ノ日給二錢、一婢専ラ一房ニ仕フル者ハ其ノ給十錢ナリ。……二錢ノ婢ノ不便ナルヲ覺工、因テ此ノ大奮発大改革ヲ行ナフ。蓋シ熱海ノ厨婢ハ其ノ給廉ニシテ割烹ノ甚

巧ミナル者多シ。本地ハ不廉ニシテ割烹ハ漁史ノ家ノ婢子ト相伯仲ス。……今ヨリ都人士ノ屢ハ来タリテ誨導スルニ非サレバ其ノ面目ヲ一新スル事能ハサラン（一九八〇一九九頁）。

熟々此地ノ景況ヲ考察スルニ遠カラスシテ此山ハ大革命ノ期ニ及ハントス。……香山ハ熱海ト異ニシテ東京人ノ来ル僅力ニ炎熱ノ侯ノミナレハ、自カラ旧天地ノ風ヲ存シ、是迄ハ何事モ淳樸ニシテ鄙野ナリ。然ルニ汽車ノ高崎ニ達セシ以上ハ東京トノ往来八時間ヲ出テス。……有名ナル三四ノ浴楼ニハ三月比ヨリ十月迄ハ絶エス浴客有リト云フ。……東京ノ有力者ニシテ此山ノ地ヲ買ヒ併テ温泉ヲモ分ツテ其ノ所有トセシ者往々有リ。而シテ浴楼十四戸ノ大家ニテ資産乏シカラス、営業ニ勉強スル者ハ有名ナル四、五戸ニ過キサル様ナリ。其他ハ……長ク其ノ旧業ヲ保ツ可シトモ覺工ス。随テ来遊ノ賓客モ自カラ少ナク……若東京ノ有力者、此地ニ心ヲ傾クル有ラハ、恐ラハク大家ノ門標ヲ他人ノ姓名ニ書キ改ムルノ変無シト謂フ可ラス。……

目下ハ向山ノ割烹店独リ全土ノ利ヲ占メタルモ、本年ハ横浜ノ千歳楼茲ニ開店シ（六月二十九日）、紅葉館モ……近キニ在レハ、此山中在来ノ易牙ハ必ス辟易スルニ至ラン。其他市街ノ店……四年前ニ比スレハ既ニ面目ヲ一変ス（一九九〇二〇〇頁）。

七月五日には紅葉館支館の開業式が行われた。「実ニ香山開ケテ以來此クノ如キ盛事ヲ見スト云フ」という盛大な式典で、東京その他から招いた賓客、伊香保の大屋一四戸の主人など多くの客を迎えて、東京より今朝送られた鮮魚を用いた料理、歌舞などが饗せられた（二〇四〇二〇六頁）。この開業は地元の人びとの競争心を喚起し、奮励させるものと述べている。

五日……紅葉館ノ開業ハ……大ニ将来土人一般ノ競争心ヲ喚起シテ

奮励セシムルニ足レリト信ス。今ヨリ山中数百年ノ慣習ヲ脱シ去テ
活発ノ精神ヲ発揚セシムル……（二〇六、二〇七頁）。

翌日は部屋で休み、七日に帰路についた。引用した箇所以外でも、
都会人によって旧風を一新していくこと、都会的な進歩を求める意識
が強く出ていることを確認しておきたい。

五 『伊香保みやげ』掲載の紀行文

『伊香保みやげ』は、湯治の徒然に読む書物として面白いものを作
りたいとの意図から編纂されたもので、一九一九（大正八）年の出版
である。大部分は本書のために新たに稿を起こして寄せられたもの
で、谷崎潤一郎、芥川龍之介、田山花袋、大町桂月、島崎藤村、岡本
一平等から寄稿された四一作品を掲載する（高木一九一九）。以下
では松崎天民と萩原朔太郎の作品を取り上げたい。

1 松崎天民「子の出来る温泉」

松崎天民（一八七八～一九三四）は新聞記者・文筆家で、大阪朝日
新聞社、国民新聞社、東京朝日新聞社、都新聞社などで記者として活
動し、独自の探訪記事で知られた（坪内二〇一一）。伊香保は子宝の
湯としても有名であり、表題「子の出来る温泉」はそれにちなむ。

天民は伊香保には二、三度遊んだことがあり、今年（一九一九年）
は五月一日に出かけたと記している。これまでは上野から汽車に乗
り、高崎で渋川行きの電車に乗り換えていたが、このときは前橋で下
車して、平井晩村と合流している。前橋の料理屋で昼食をとってから
渋川行きの電車に乗り、渋川ですぐに乗り換えて、夕方、伊香保停車
場に到着した。

成島柳北の紀行に書かれた頃と比べて、電車開通後の伊香保の繁栄

ぶりが描写されている。伊香保の特色という温泉組合事務所付近から
石段街を見上げる構図は、絵はがきでも定番となっていた（図6）。
この構図は『伊香保志』の挿絵（図4上）とも一致する。停車場付近
の八千代公園や貸別荘の開発は、木暮武夫によって明治末以降に進
められたもので（木暮一九五九、五～七頁）、鳥瞰図でも確認できる
（関戸二〇二）。

今回は「二日一夜の旅」であり、翌日正午に伊香保停車場を出发
し、午後六時頃に東京渋谷の自宅に帰っている（松崎一九一九、二二
五～二二六頁）。交通手段の改良により、こうした一泊旅行が可能に
なったのである。

前橋より渋川までの電車路に、上州群山の眺望を恣にせんこと
は、予が多年の宿志なりしものを、あわれ心憎の雨や。……麓より
温泉場までは、二里に余る道程なれど、海拔二千六百尺を登り行く
電車は、右に左に八十七曲りして……這ふやうにして進む。……伊
香保の終点に達す。山上の停車場にしては、如何にもハイカラ風
に、小じんまりと出来たる出口に立ちて、夕暮れの伊香保を上げ
ば、榛名の相馬岳などを背景とせる温泉町は、シヨボ降る雨の中に



Hot-spring Ikkabō, Jiōshū. 温泉伊香保伊州上

図6 伊香保温泉の石段街の景観
右に丸本旅館、左に木村旅館がみえる
ので位置を特定できる。
発行時期 1918-33年（筆者蔵）

閑寂なり（二二八〜二二九頁）。

今は数十軒の温泉旅舎在りて、年と共に繁昌し、御用邸も在れば、有栖川宮、竹田宮様なども御来浴あり。大正六年には延人員三十万七千八百九十八人の入浴者ありて、箱根などよりも繁昌し……。今は水力電氣が出来て、電燈電話にも事欠かねば、難工事の電車も開通し、日本一流の温泉場として持囃されて居れど……成島柳北翁の紀行に書かれし頃の伊香保は、其名も大に現れず、淋しき山中の温泉村なりしならん（二三一頁）。

翌朝は……伊香保の町をそぞろ歩く。……温泉に依りて生計せる町の家並は、山の勾配に従つて段々となり、上の床は下の庇と相隣せるなど、他にては見られぬ風趣あり。

温泉組合事務所の前あたりより、一路通ずる石段道を仰ぎ見れば、初めて伊香保の特色ある温泉町の気分を感じずべし。右左へ通ずるには、旅館の中庭を勝手に通り行くにて、そこには滞在の湯治客が、手拭や浴衣などを欄に干し、寝ころびて雑誌などを読み居る姿を見る（二三二〜二三三頁）。

町の散歩より帰つて、また小さき浴槽に入り、軽き汗を流して朝食の膳に向ふ。紅き躑躅に早くして、黄なる山吹今を盛りの八千代公園には、森々たる樹立あり、湯の流れありと。亭あり。別荘は八畳二室、六畳三室、四畳半一室に、上下の便所、台所、浴槽などありて、一家を挙げて来り住むに適し。盛夏七八月を三百円近き家賃にて、何人にも貸与する由なれば、大概某の侯爵、某の子爵に予約ありて、普通の座敷にても、七八月は一人を容るゝの空室も無しとぞ。静なる伊香保に遊びて、心身の悶々を忘れんとする人には、四五六月の晩春初夏か、九十月の秋を選むが最も適し（二三五〜二三六頁）。

2 萩原朔太郎「石段上りの街」

萩原朔太郎（一八八六〜一九四二）は前橋生まれの詩人で、伊香保へは子どもの時から度々行つていたという。第一詩集『月に吠える』の出版は一九一七（大正六）年であり、「石段上りの街」は詩人としての名声を高めたあとに執筆されたことになる。これは、特定の旅行について記したしたものではなく、朔太郎がどのように伊香保を捉えていたかが、よくわかる作品になつてゐる（萩原一九一九、二七一〜二八五頁）。

朔太郎の温泉の好みは、独自の視点によつてゐる。「田舎者の湯治場」といつた感じのする所は何よりも嫌ひだ」（二七三頁）、「皆嫌ひな温泉ばかりで、好きだと言ふのは一つもない。自分の好きな注文を言へば……都会風の明るい感じの者で、小ぢんまりとして居る所が好い」（二七五〜二七六頁）という。

朔太郎は、中庸的、女性的といった言葉で伊香保を捉えている。騒々しい夏や百姓が詰めかける秋ではなく、「静かな華やかさ」が感じられる晩春・初夏を薦めている。また、建物の密集した石段街のもつ独特な雰囲気や電車停車場付近の都会的な風景が描かれている。

若い新趣味の人には食ひ足らず、古い老人には漢詩的風情がなさすぎる所から、一般に伊香保の愛顧者は穩健な婦人に多い（二七二頁）。

伊香保は中庸的の温泉であるから、自分の趣味で好きといふには不適當だが、嫌ひといふやうな所は全くない。……何度行つてもその度毎に親しみのあるやうな、比較的飽きない温泉である（二七七〜二七八頁）。

伊香保の特色は、だれも感ずる如く、その石段あがりの市街にある。実際伊香保の町は、全部石垣で出来て居ると言つても好い。その石段の両側には、土産物の奇木細工を売る店や、かういふ町に適

当な小綺麗な小間物屋や、舶来煙草を飾つた店や、中庭に廻廊のある二層三層の温泉旅館が、軒と軒とを重ね合せて、ごてごて不規則に並んで居る。そしてその石段道の一方からは、絶えず温泉くさい湯気が騰々と立ち登つて、如何にも温泉場らしい特異の感じがする。それに山の霧が多いので、いつも水蒸気で町の軒燈が紅色にかすんで、一層山間都市の華やかな感じを深める。また伊香保の町は、全体に細い横丁や路次の多い、抜道だらけの町である。人の家の中庭を突つきつて街路へ出たり、狭い石垣の下を通つて横丁へ出たり、勝手口のやうな裏道を迂廻したり、小さな坂を登つたり降りたりする所が多い（二七八〜二七九頁）。

今の伊香保の第一印象は、電車の停車場附近であるが、あの辺の気分も悪くない。第一、あゝした山の中に、電車の停車場といふやうな者があると、その辺の空気を奇体に明るくする。……適度の文明的人工物は、自然をして軽快ならしめ、森や林や山巒に、微かな香水の匂ひをあたへる。緑蔭に於ける白のベンチ、野景に於ける女のパラソル等も、またこの意味でのよい人工的反映である。新緑の中を走る電車、それは伊香保の追憶の中で、最も情緒の高いものであらう（二七九〜二八〇頁）。

伊香保のいちばんいゝ季節は、晩春四五月から、初夏の六七月へかけた時期である。真夏の伊香保は、自然としても初夏のそれに劣るが、何しろ悪いことは、文字の通りの意味で雑鬧混雑を極めることである。……温泉場の気分は「静かな華やかさ」にあつて「賑やかな騒々しさ」にないのだから。とはいへ秋の伊香保もまた感心しない。自然は相当に美しいが、何分近在の百姓が大勢詰めかけるので、伊香保そのものの空気が、まるで田舎の温泉場に変つてしまふ。その頃の伊香保は、何となく感じが黒ずんで陽快な所がない（二八〇〜二八一頁）。

この温泉の空気を代表する浴客は、主として都会の中産階級の人

であるが、とりわけさうした人たちの若い夫人や娘たち——……不
如婦の女主人公を思はせるやうな、少しく旧式な温順さをもつた、
どこか病身らしい細顔の女たち——である。前に伊香保の愛顧者は
女性に多いと言つたが、つまりその女性とはかういつたやうな、中
庸的の夫人や娘たちである。不思議に伊香保といふ所は、何から何
まで女性的であり中庸的である（二八四〜二八五頁）。

六 おわりに

温泉地は明治期以降、長期滞在客が療養する湯治場から短期滞在の
遊覧客を迎える観光地へと推移していった。ここでは伊香保の位置づ
けを明確にするために熱海と対比したい。

『日本鉱泉誌』掲載の明治初期の入浴客数をみると、熱海三万四三
六八八（一八八二〜八三年平均）、伊香保二万四八八三人（一八八
〇〜八二年平均）であり、熱海が上回っていた。熱海は温暖な地で避寒
客も多く訪れて通年で賑わっていたが、伊香保は春から秋までの季節
営業であつた。

東京と熱海のあいだには週一回の定期汽船があり、五時間ほどで結
んでいたので（内務省衛生局一八八六、一四五頁）、伊香保と比べれ
ば、移動が容易だったといえる。村山良太郎『熱海土産保養の葉』
（一八九七年）の交通案内をみると、東京から熱海まで、海路は汽
船、陸路は国府津までは東海道線、小田原までは馬車鉄道、熱海まで
は客車を人が押して運ぶ人車軌道が案内されている（関戸二〇一
二）。国鉄熱海駅開業は一九二五（大正一四）年のことで、陸路の整
備は伊香保よりも遅れた。

一九二五年の入浴客数を比べると、熱海一五万四三八六人、伊香保
二二万五〇三七人となつていて、伊香保の方が多くなつてゐる（関戸
二〇〇七、一七一頁）。このように入浴客数からみると、成島柳北が

「大革命」と表現した大きな変化が伊香保において生じたこと、温泉街が急速に発展したことが理解される。

大槻文彦や成島柳北が伊香保を訪れた頃は、夏を中心に賑わい、長期滞在が一般的であったので、宿泊客同士が交遊を深める場ともなっていた。成島柳北は伊香保に二週間ほど滞在しており、それゆえに下女や割烹料理店の食事に不満をもち、改善を求めたのであろう。

松崎天民と萩原朔太郎の作品を読むと、大正期における伊香保の繁昌ぶりがうかがえる。石段の両側に並ぶ店舗や大きな旅館が段をなしている街並みの趣、石段街から横丁や裏道に入ったり、旅館の中庭を抜けて行ったりするときの温泉街の風情、停車場付近のハイカラな雰囲気などを追体験することができる。

ちなみに伊香保に女性客が多かったことは事実である。大正期には全国的にみて男性客の方が多かったが、『全国温泉鉱泉二関スル調査』（一九三三年）において一五万人以上の入浴客を集めていた一六の温泉地を比較すると、伊香保は湯田（山口県）に次いで女性の割合が多く、男性の割合は五〇・五％に留まっていた。一方の熱海は男性の割合が六三・二％と高かった（関戸二〇一八、二〇二頁）。

明治・大正期は、盛んに紀行文が書かれ、かつ読まれた時代であった。案内書にも先人の紀行文や詩歌などを掲載するものが多く、旅行と読書が結びついていた。本稿では、案内書や紀行文のテキストを活用することで、旅行中の経験やその当時社会的に共有されていた場所イメージなどを見出すことができた。

【注】

- (1) 群馬県における公娼廃止の過程のなかで、伊香保村は最も早くその対象となった。一八八二（明治一五）年四月に貸座敷及び娼妓稼の廃止に関する群馬県の布達が出された。「翌年六月に到り悉く他に転業し全く娼娼地となり、返つて温泉の神秘的気分を味はわせたり」（狩野一九三〇、四〇六頁）

と娼娼が実行された。伊香保村は、湯中子村、水沢村と合併して一八八九年に伊香保町となった。

- (2) 旧姓村松、国語学者、方言研究の基礎を作った東条操（一八八四～一九六六）。文中に「今年九月東京帝国大学文科国語科生となる」と記されている（大槻一九三八、九〇頁）。

- (3) 『朝野新聞』への掲載日は、Friedrich（二〇〇八）による。

- (4) 函嶺は箱根の異称。

- (5) 易牙は中国春秋時代の料理人。

【参考文献】

伊香保町教育委員会編（一九七〇）『伊香保誌』伊香保町役場。

大槻文彦（一八八二）『伊香保志 卷一』国文社。

大槻文彦（一九三八）『復軒旅日記』富山房。

岡崎 一（二〇一九）「明治文化史の中の料亭―著名人の日記を基に―」人文学報告（首都大学東京）五二五一〇、一七～五七頁。

狩野平六（一九三〇）『群馬県公娼廃止沿革史』群馬県警察部。

岸 又太郎（一八八四）『伊香保温泉略説』東陽堂。

群馬県立土屋文明記念文学館（二〇〇八a）『榛名・伊香保文学紀行―旅人たちのものがたり―』群馬県立土屋文明記念文学館。

群馬県立土屋文明記念文学館（二〇〇八b）『青き上に―榛名・伊香保文学紀行―』群馬県立土屋文明記念文学館。

木暮三郎（一八九七）『伊香保の温泉』木村貞次郎。

木暮武太夫（一九五九）『名家香山記』（再版増補版）木暮武太夫。

関戸明子（二〇〇二）「鳥瞰図に描かれた伊香保温泉の景観」えりあぐんま八、二二～四〇頁。

関戸明子（二〇〇七）『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版。

関戸明子（二〇一三）「案内書からみた明治期の熱海温泉―現代風俗研究会年報三三、一一～二二頁。」

- 関戸明子（二〇一八）『草津温泉の社会史』青弓社。
- 関戸明子（二〇二〇）「前橋・高崎周辺の街道と利根川への架橋」地図中心五五七、八〇九頁。
- 関戸明子（二〇二三）「江戸後期から明治期の紀行文にみる妙義山登山」群馬大学共同教育学部紀要（人文・社会科学編）七二、三七〇～三七八頁。
- 高木角治郎編（一九一九）『伊香保みやげ』伊香保書院。
- 武内馬溪編（一八八四）『柳北仙史 熱海文藪』世古六之助。
- 千葉正士・石村善助・小林三衛・北條 浩（一九六四）「伊香保」、川島武宣・潮見俊隆・渡辺洋三編『温泉権の研究』勁草書房、三四四～三八一頁。
- 坪内祐三（二〇一一）『探訪記者松崎天民』筑摩書房。
- 内務省衛生局編（一八八六）『日本鉱泉誌 中巻』報行社。
- 成島復三郎編（一八九二）『柳北遺稿 上巻』博文館。
- 萩原朔太郎（一九一九）「石段上りの街」、高木角治郎編『伊香保みやげ』伊香保書院、二七一～二八五頁。
- 北條 浩編（一九六三）『旧慣温泉権史料集―群馬県伊香保町千明仁泉亭文書―』宗文館書店。
- 前田 愛（一九七六）『成島柳北』朝日新聞社。
- 松崎天民（一九一九）「子の出来る温泉」、高木角治郎編『伊香保みやげ』伊香保書院、二二五～二二六頁。
- 森本 春（二八八〇）『伊香保温泉独案内』森本春。
- 山村順次（一九六九）「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落形成の意義―集落の社会経済構造からみた―」地理学評論四二、四八九～五〇五頁。
- Matthew Fraleigh（二〇〇八）「国際人成島柳北の旅した明治日本」国際日本文学研究会年会議録三一、四九〇～四九六頁。

〔付記〕

『伊香保志』の翻刻にあたっては久保康顕氏の教示をえた。本研究は、JSPS 科研費（基盤研究（C）22K01057）の助成を受けたものである。

（令和五年九月二十七日受理）